

友よ 第二回

赤神 諒



第二章 藤目城の守将

——天正六年（一五七八年）十二月、讃岐国・藤目



未だ明けやらぬ夜霧は、鮮血で出来ているかのように生臭く煙っていた。

信親のぶちかは初めての戦場で、使い込んだ直槍の柄を握り締めた。

突き上げてくる衝動に任せ、腹の奥底から若き雄叫びを上げる。

おぼろな月影つきかげを頼りに、異郷の森を夢中で駆けた。どちらへ向かっているのかも定かでない。

友よ 第2回

華々しく初陣を飾るために新調したはずの漆黒の甲冑は、血の夕立でも浴びたごとくに、敵味方の血で滑りを帯びていた。

「彦十郎！ 弥次郎！ 生きておるか？」

四方の暗がりで上がる剣戟の音と断末魔の中を、信親は叫ぶ。が、返事はない。

鯨波に続いて、左手から黒い群れが奔流のごとく押し寄せてきた。あと一寸まで突き出された槍を素早く払う。その穂先で、すかさず相手の胸を突いた。

怒号を上げながら仁王立ちすると、敵の足軽どもが怯えて、後ずさりした。

——畜生！ 負けた……。

戦の采配は敵将のほうが明らかに数段上だった。

信親隊は散々に攪乱されたあげく、森の中を四散していた。

すっかり葉を落とした冬の森に淡い月光が差しても、まだ満ちぬ月明かりの下では、彼我の別も容易でない。

「若様、ここにおわしましたか！」

背後から駆け寄ってきたのは、黒の甲冑に身を固めた一領具足の渡だ。岡豊城下の直領に住まうため、昔からよく知っていた。小兵のくせに大身槍を見事に使う。頼りになる男だ。

「手を貸してくれ、渡。皆が散り散りになった」

友よ 第2回

渡は非凡な槍の腕前を買われ、土佐最強の福留隼人の隊に属していた。同隊の甲冑は漆黒で統一されている。隼人から武芸を学んできた信親も、その武名にあやかかって同じ甲冑にした。

「若の隊だけが突出しとりますで。早うお戻りあれ。周りは敵だらけですわい」

前線で孤立する信親たちを救い出すために、福留隊の精銳が動いたらしい。

「この俺が、皆を置いて逃げるとでも思ってたか！」

将が兵たちを見捨てて逃げ出したなら、死んだ兵にどうやって詫びるのだ？ 生き残った兵にどんな顔をして会えばよいのだ？ それだけではない。無様に負けたまま退けば、初陣の膳立てをしてくれた元親と忠兵衛の面目が丸潰れだ。

「敵将は相当の戦上手じゃと、福留様も言われとりましたで。夜明けまでひとまず——」

渡を無視して、信親は前へ出た。

あと少して、空き城へ攻め上がれる。散らばった兵さえまとめれば、形勢を変えられるはずだ……。

土佐軍が讃岐へ侵攻すると、藤目城の守将・新目弾正は、寡兵で籠城に入る構えを見せた。ところが、城に近い松茸尾山に布陣した土佐軍に対し、新目は突如、全将兵で夜襲を仕掛けてきたのである。着到して間がなく陣をまだ固めていなかった土佐軍は、大混乱に陥った。

友よ 第2回

敵の狙いはむろん、総大将たる元親の首だ。

元親の本軍脇に三百の兵で布陣していた信親は、谷彦十郎の助けを得て陣を立て直すや、本陣の前へ兵を展開し、元親を守る壁を作った。錐揉みのごとき敵の猛攻をまともに食らったが、信親は陣頭で指揮を取り、自ら豪槍を振るって、猛然と敵勢を押し返した。

激闘の末、信親は彦十郎、波川弥次郎らを従えて、逆に攻勢へ出た。敵兵力はわずか五百だ。本来なら、五千余の長宗我部が敗れるはずもなかった。

敵を打ち崩した勢いそのまま猛追し、空き城を目指して攻め上がるうとした時、林の中を突然の矢嵐が襲ってきた。伏兵だ。ちょうど木がまばらに生えている場所だった。勝手知ったる地形で、敵は手ぐすねを引いて待ち構えていたわけだ。信親隊は脆くも壊乱した。

「彦十郎！ 弥次郎！ どこにおる？」

信親のすぐ後ろを、渡が大身槍を構えながら従う。

三顧の礼ならぬ実に十三顧の礼で、ようやく彦十郎が神官から再び侍に戻り、直臣になってくれたのだ。それをむぎむぎ最初の戦で、死地に彷徨わせるとは……。

「若、喧しゅう騒がれずとも、ここにござる」

少し離れた樹幹から、落ち着いた低音が聞こえてきた。

見やると、彦十郎が樹幹に身を隠しながら、片膝を突いて鉄砲を構えている。

友よ 第2回

轟音と共に炎が噴き出し、銃弾が放たれた。

再び迫っていた敵勢が、突然の反撃に怯む。

「最後の弾でござる。若、今のうちに引き上げまするぞ。退路はおおよそわかり申す」

「弥次郎を知らぬか、彦十郎？」

「否。しごく厄介な敵将が近くにおり申す。三十六計逃げるに如かずじゃ」

冷やかに応じて腕を掴む彦十郎の手には、力が込められていた。

気の進まぬ従弟を初陣に連れ出したのは、信親だ。この数か月、弥次郎は真剣になぎなた薙刀の鍛錬に打ち込んだ。師の大平は最初、余りの不甲斐なさに「見込みはござらん」と断言していたが、ひと月ほど前、「意外や意外、物になるやも知れませぬぞ」と見立てを改めたほどだった。弥次郎は少し背も伸びた。やっと自信を持ち始め、お気に入りベの紅糸威べいの具足を着て出陣しているのだ。

「今、俺が退けば、どうなる？」

敵は再びあの尖った錐と化し、元親の本陣目がけて突入するのではないか。

「本陣は愚父がとっくに守りを固めておるはず。今夜は戦わぬようにと申し上げたはずじゃ」

奇襲を受けたとき、彦十郎は本陣の隣を固く守れば足ると、信親を強く諫めた。先だって反撃に出た際も、地の利がないと反対した。が、

友よ 第2回

信親は押し切って攻撃に転じた。彦十郎が案じた通り、まんまと敵の計略にかかったわけだ。

「すまん、彦十郎。お主がすべて正しかった。が、俺は弥次郎を守らねばならん」

守ると約束したのだ。仲の良い弟が帰らねば、お福がどれだけ嘆き、悲しむことか。お福の、その名の通り福々しい笑顔が思い浮かんだ。

「敵将は相当の切れ者。今は勝ち目がござらぬ」

彦十郎が耳元で叱るように囁いてきた。

「弱き者が命を落とすは乱世のならい。御曹司なら、今は己が生き延びることのみ考えられよ」

腕を掴んでいる彦十郎の手を、乱暴に振り払った。

「弥次郎はいずこだ？ 弥次郎はおらぬか！」

叫びながら、迫ってきた敵の一团に向かって突進した。

猛然と槍を突き入れると、敵が怯んだ。そのまま、突っ込む。

「若様、お待ちあれ！」

渡の叫び声が背後で聞こえたが、信親は止まらない。

土佐きっての猛将、福留親政・隼人父子から伝授された信親の武芸は、未完成ではあっても、並みではない。この時のために、幼き日から武技を練り続けてきたのだ。信親と互角に渡り合える者は、家中でも今や数えるほどだ。自信はあった。

「若様、ここでございまする」

友よ 第2回

声変わり途中のおどおどした声が、左手の下方から聞こえてきた。

「無事か、弥次郎！ 今、助けに参るぞ！」

薄明かりだけを頼りに、信親は岩場から飛び降りた。

ぶんと風音を立てて槍を振り回し、敵兵を追い払う。

弥次郎は岩陰に小さくなって隠れていた。薙刀を多少使えるようになっても所詮は付け焼刃で、戦場では通用せぬわけか。

「怪我はないか？ 俺が来たからには、安堵せよ」

手を差し出した時、間近で鯨波が上がった。

——はめられた！ 敵が簡単に退いたのは、誘い込むためか。

大岩を背に、弥次郎を庇いながら槍を構える。

「ほう、先ほど本陣の前で暴れていた将ではないか。こたび初陣を果たした長宗我部の御曹司と見ゆる。思ったより大きな獲物が罫にかかったようだ」

敵勢の中から現れたのは、一人の中背の将だった。

身を覆う白銀の具足が夜更けの月明かりで鈍く輝いている。敵将、

新目弾正だった。

「その若さで気の毒だが、故郷と皆を守るため、命を貰う」

新目は長い穂先の片鎌槍を構えながら、一步前へ踏み出してきた。

「売られた喧嘩は買うと決めている。さもなければ、長宗我部の名がすたるゆえな」

信親は使い慣れたりょうしのぎ両鎧の直槍を、中段に構えた。

友よ 第2回

「生憎あいにくこれは、喧嘩けんかではない。ただの、殺し合いだ」
新目が片鎌槍を突き付けてきた時、信親は場が異様な気迫に包まれるのを感じた。

息詰まるほどの緊張だ。

なぜだ。金縛りに遭ったように、体が一瞬、動かなくなった。

——もしや俺は、怖いのか……。

凄まじい風音と共に、踝くるぶしに痛みが走った。

気が付くと槍の石突で足を払われ、体が宙に浮いている。

あっという間に仰向けに倒された信親の喉元を、新目の片鎌槍の穂先が捉えていた——。



二

藤目城を望む松茸尾山の長宗我部軍本陣では、敵襲を避けるべくすべての松明が消されていた。いつしか雲は去り、初冬の月明かりが、帷幄いあくを朧おぼろに照らし出している。

谷忠兵衛は主君の傍らにあった。

元親は姿勢よく床几しょうぎに腰掛けて沈黙を守っているが、握り締められた濃鼠こいねずの鉄扇てつせんは内心の苛立ちを表すように、時おり意味もなく左の掌上へ降ろされ、パシッと小気味良い音を立てていた。

「殿、少しばかり、空が白んで参りましたな」

友よ 第2回

忠兵衛が声を掛けても、元親は返事をしなかった。喊声、剣戟、悲鳴や鯨波があちこちに上がる、黒い森をじっと見つめたままだ。

——やはり戦は魔物じゃ……。思わぬところで足をすくわれる。

長宗我部にとっては、完全な誤算だった。

元親も忠兵衛も、今回の藤目城攻めを勝利の見えた小競り合いだと考えていた。新目弾正なる城将は降伏勧告を丁重に拒否してきたが、十倍する兵で揉めば簡単に勝てると二人は見込んだ。

だが、名もなき将が戦下手だとは限らない。

新目は五百の寡兵で、十倍する相手に全軍で奇襲を仕掛けてきた。かくも見事な夜襲を成功させ、抜群の武勇で土佐軍を苦しめようとは、予想だにしなかった。おおよそ戦の巧拙は、天賦の才と経験による。二十二歳の無名の将は、持てる才を示す機会に恵まれなかったただけだ。

「夜明けまで、あと半刻ほどでございませうか？」

苦すぎる沈黙を和らげようと忠兵衛が口を開いても、元親はかすかに頷いてから、また意味もなく鉄扇を鳴らしたただけだった。

「御館様、いったん松茸尾山を下りまするか？」

敵が逆転できるとすれば、総大将を討つ以外に手はない。夜陰の乱戦に乗じ、布陣の間隙かんげきを衝いて一気に突入してくる恐れがあった。悪いことに土佐軍は、明け方に城を包囲すべく、襷たすきのように横長の陣を敷く段取りであったため、陣の層が薄く、将兵が分散していた。

友よ 第2回

元親は忠兵衛の進言に対し、ことさら無言をもって応じた。

敵兵力は十分の一にすぎない。へ土佐の出来人」と称えられる誇り高い元親にとって、たとえ一時とはいえ、撤退は受け入れ難い判断であつたろう。

大きな誤算は、新目以外にもう一つあつた。本陣の至近に布陣していた信親の動きだ。

万が一にも初陣の嫡男を危ない目には遭わせまいと、元親は隣に信親隊を布陣させたが、これが裏目に出た。自慢の孝行息子は、敬つてやまぬ父の帷幄へ突撃させじと果敢に防壁を作つた。敵の攻撃を正面から受け止めると、さらには反撃へ転じ、敵将の罫に落ちた。

「御館様。最右翼の兵をひとまず、柞田川沿いに展開させましてございまする」

慌ただしく現れた小柄な若者は、弓上手の桑名太郎左衛門親光である。

正しい判断だ。城から離れるが、無用の同士討ちを避けるためには確実な布陣だつた。

「大儀。隼人からの報せは、まだか？」

元親の口調は焦りを帯びていた。同じ問いは、これで五度目か。

福留隼人儀重は、昨年伊予で戦死した父親政の後を継ぎ、今では土佐最強の猛将であつた。武芸百般に通じた武人で信親の師でもあるが、戦場では父譲りの大太刀を好んだ。本来なら隼人は、出陣し

友よ 第2回

てきた新目の首を真っ先に取りに行く役回りだが、信親を救い出すため、元親の命で寡兵の精鋭を引き連れ、混戦の中を探し歩いていた。

——まだ、何も報せはございません。

改めて確かめに出た近習が帷幄に戻ると、元親の鉄扇が掌上でバシッと荒い音を立てた。

「全軍に力攻めの支度をさせよ。桑名は右翼の兵を率い、一気に城へ攻め上げられ」

「御館様、お待ちくださいませ！」

忠兵衛は慌てて申し出た。端整で色白な元親の顔は、月影を浴びて血の気も引いたように蒼褪あおきめて見えた。切れ長の目がじろりと忠兵衛を睨んでいる。

元親は弱小の一土豪から始め、十年余で土佐を統一した一代の英傑だった。

沈着冷静にして果敢、家臣領民を慈いづくしむ完全無欠の主君だと敬服してきたが、近ごろただ一つ、気懸かりな点があった。それは、今後の成り行き次第では、長宗我部家の命運さえ左右しかねぬほどに大きな懸念でもあった。

「城攻めは空が白んだ後になされませ。敵はまだどこに潜んでおるか知れませぬ。これほどの混戦となれば、林の中を動くだけでも、同士討ちとなりかねませぬ」

友よ 第2回

隼人があえて少数で出向いたのも、数百の手勢では小回りが利かず、慣れぬ地で互いに敵勢と誤認し、同士討ちを演ずる羽目になるからだ。

若年ながら、新目弾正は用兵が実に巧みだった。

信親隊の猛反撃を受けるや鮮やかに兵を退き、林の中のあちこちに兵を散らばらせた。地の利を活かし、土佐軍を攪乱かくらんして同士討ちさせるためだ。知悉ちしつした地元にあつて寡兵ゆえに周りが敵だらけの新目勢とは対照的に、土佐兵は常に相手を確かめながら及び腰で戦わねばならぬ。誰何すいかをすれば居場所を教えてしまい、返事代わりに敵が突撃してくる。今だけは、敵が有利だった。

もちろん元親とて、百も承知だ。もし戦場に信親がいなければ、落ち着き払って守りを固め、猛反撃に移るべく待ち構えていたに相違ない。

「夜明けを待ってはおれぬ」

ついに荒々しく立ち上がった元親の声には、苛立ちが作る震えさえ混じっていた。

夏ならとうに夜明けの刻限だが、冬場だけに、川の淵に淀む迷い水のごとく日の出が遅い。

「いま少しの辛抱でございます。ここは隼人に任せられませ」

隼人が遅いのは、深追いして敗れた信親隊が森の中で四散して、行方が知れぬからだ。この暗がりでしたらずらに兵を動かせば、隼人の捜

友よ 第2回

索にも障りが出る。下手を打てば、信親たちとの同士討ちさえ、演じかねなかった。

「忠兵衛よ。万一、信親を失えば、長宗我部は滅ぶぞ」

まるで裏切り者でも見るような目つきで、元親が忠兵衛を睨めつけている。

元親による信親の溺愛は、度を越していた。

世の中には、子を犠牲にして生き延びる親もいるが、信親を救うためなら、元親は迷わず己の命を投げ出すに違いなかった。

忠兵衛ら側近は、元親から日に三度は「信親」の名を聞かされた。

年寄りの繰り言のように、同じ話題も少なくない。信親のことを二六時中考えているのか、元親は一度決めた事柄でも、本当に信親のために最善といえるか、家臣たちに改めて意見を求め、何度でも考え直し、朝令暮改さえ厭わなかった。以前では考えられぬ行動だが、信親の成長に従い、元親は少しずつ変わってきた。そんな時の元親に、これまでの果敢な英主としての姿は、まるでなかった。

「信親からの報せも、ないか？」

——先だっつての、藤目城へ攻め上がるとの報せの後は、何もございませぬ。

元親は荒い音を立てて、再び床几に座り込んだ。

友よ 第2回

敵が城を空けている以上、本拠地を攻めるのは正しい。敵は兵を退かざるを得ず、味方も苦境から脱する。だがそれは、家臣がすべきであって、御曹司が自らやる類の戦ではない。

ようやく明け始めた空を見上げた時、前方、森の奥のほうで大きな喊声が上がった。

元親が再び立ち上がると、反動で床几が後ろへ倒れた。

「これより全軍で押し出す。余自ら、出る」

忠兵衛は行く手を塞ぐように元親の前へ出て、片膝を突いた。

「それこそ敵の思う壺。桶狭間おけはざまをお忘れにございますか？」

「いや、当家は今川とは違う。たとえ余が討たれようとも、長宗我部には、信親がおる」

主従は睨み合った。

確かに自慢の御曹司は、誰の目から見ても好ましい若武者だった。

元親が幼い弥三郎に「わからぬことは、物知りの忠兵衛に尋ねよ」

と初めて引き合わせたとき、まず根掘り葉掘り問われたのが、猿猴えんこう

の居場所だった。童の夢は壊せまいと、各地の伝承を調べては語り聞かせ、祭りにも連れて行ったが、今でも何につけよく物を探ねてくる。

長じて信親は、竹を割ったような人柄となり、父母に孝養を尽くし、上からも下からも好かれた。行く末は元親と家臣団の期待通りの後継者となる。皆が口々に信親を褒め称えるたび、信親が日々己を高め両親を気遣うたび、元親の溺愛は深まってきた。お家騒動などの懸

友よ 第2回

念は皆無だが、余りにも御曹司を大切に思うがゆえに、時として元親の判断はゆがんだ。もともと元親は何事にも手堅い主君だったが、近ごろは失敗も目立つ。かつての果断が曇り始めていた。元親による勇み足も、逡巡も、手遅れも、原因はすべてただ一つ、信親への溺愛だった。

「実は、折よく入江左門が戻りましたゆえ、白地城から若殿に付けておりました。されば、ご案内いたしますな」

入江は抜群に腕の立つ手練の忍びだ。もともと自分を警固していた入江の恐るべき才覚を、元親もよく知っていた。信親には知らせず、その身边を密かに守らせてある。

「……さようか。だが、まことあの者を信じてよいのか？」

元親はほっとした様子を見せながら、同時に咎めるように忠兵衛をじっと見た。入江の配置を元親に知らせなかったのは、忠誠に懸念があったからだ。

「ご安心を。入江に怪しい動きはございませぬ」

入江の出自と過去に鑑みれば、長宗我部家に忠誠を尽くす理由は別段なかった。今は信じるほかない。

「おのれ、新目弾正め！ 忌々しき若造よ！」

元親が珍しく怒鳴った。手にしていた鉄扇を容赦なく地面へ叩きつけると、要が外れて扇がバラバラになった。

友よ 第2回



新目の片鎌槍がいったん後ろへ引かれ、その長い穂先が突き出された瞬間――

信親の眼前に、黒い小さな影が飛び出してきた。

刃が肉を貫く鈍い音がし、うめき声が上がった。渡が己の腹で、新目の槍を受け止めている。

「一領具足を、舐めるな」

どんと大身槍の石突いしつづきで地面を突くと、渡は腹に槍を食らったまま、立ち上がった。

「わしの若様に、手出しはさせんわい！」

繰り出された渡の槍を避け、片鎌槍を抜いて退いた新目が、月影の下で寂しげに笑った。

「お前たちさえ攻めて来ねば、こちらから手なぞ出さぬのだがな」
腹の傷をもともせず、渡が自慢の大身槍を新目に突きつけた。

渡の豪槍はこれまで名のある将を屠ったこともあった。だが、新目に勝てると思えぬ。まして手負いだ。渡を死なせたくなかった。

「待て、渡。そやつはやめておけ！」

信親は急いで立ち上がるうとした。が、新目に払われた踝くるぶしが痺れている。情けなくよろめいて、片手を突いた。

「素直に降伏すれば、戦をせんで済む。どうじゃな？」

友よ 第2回

「降れば、他人のための戦に駆り出されよう。されば皆で話し、戦うと決めた」

問答無用とばかり、新目が槍を突き出した。目にも留まらぬ速さだ。それでも渡の槍が払った。が、新目はすでに渡の右手へ回り込んでいる。新目の槍の穂先は、渡の背後にあった。

渡が右へ槍を突き出そうとしたとたん、一声あげて、くずおれた。

——何という、速技か……。

新目の片鎌が一瞬で水平に動き、引き際に後ろから渡の首筋を切ったのだ。

信親は渡の名を呼びながら、槍を持ったままへたり込む小柄な体を抱き止めた。

「しっかりせよ、渡！」

「若、様……逃げ、なされ……」

渡が血反吐を吐くと、たちまち信親の具足が生温かい血に塗れた。

「生きよ、渡！ 頼む、死んではならん！」

信親が必死で体をゆすっても、渡はもう返事をしなかった。

「その者は苦しまずに、死なせた」

新目が憎々しいほど張りのある低音で続けた。

「土佐の一領具足が長宗我部の御曹司のために死ぬるは、本望であつたろう——」

「本望なものか！ 渡には、六つになる娘がおったのだ！」

友よ 第2回

会うたび渡は、目に入れても痛くないほど可愛いと、小さな愛娘を自慢していた。働き者の渡は小さな田畑で野良仕事をしながら、それだけでは食べていけぬと、川漁にも精を出していた。賑やかな男で、祭りともなれば、必ず村を代表して音頭を取ったものだ。

——こんなはずでは、なかった……。

「新目弾正、赦さぬ！」

信親が直槍を握り締めて立ち上がると、新目は涼やかに笑った。

「ふん、友を殺されたのは、初めてか」

「友、だと……？」

「人は、大切な者を殺められるまで、他人の痛みがわからぬ。救いようもなく愚かな生き物だからな」

信親は両鎧の槍を上段に大きく構え、穂先を新目の胸板へ向けた。身丈は信親のほうが高い。へ三ツ玉で勝負をかける。胸板を狙うと見せて反転する。次は胴を狙うと誤信させつつ、足を払って倒し、とどめを刺す高度な技だ。信親はこの時のために、来る日も来る日も、厳しい鍛錬を積んできたのだ。

息苦しいほどに動悸がする。

信親は愕然とした。両手がぶるぶると震えている。いや、全身だ。なぜだ——。

「それが、死の恐怖というものだ、御曹司」

新目は落ち着き払って、再び片鎌槍を中段に構えた。

友よ 第2回

穂先は渡の血で濡れ、白銀の具足は返り血で染まっていた。

——この俺が、怯えているのか……。

稽古では、自分が死ぬことも、相手を殺すことも、ない。さっきの新目の技はほとんど見切れなかった。渡も全く歯が立たなかった。どれほど強がっても、内心では勝てぬとわかっている。ゆえに、体が敏感に恐怖しているのか。

「若、本陣へ戻る頃合いでござる」

信親の隣に現れたのは、彦十郎だった。

火の点いた火縄が煙を出している。新目に向かい鉄砲を構えているが、弾切れのはずだ。それでも二人で力を合わせれば、何とかこの場を逃げ切れるだろう。

だが、信親は長宗我部の御曹司だ。逃亡など、生まれつき似合わぬ。

「俺は渡の仇を取る」

「戦では、必ず味方の誰かが死に申す。一兵卒の死に一喜一憂しておったのでは、この先——」

彦十郎を遮って吼えながら、信親は槍を構え直した。

「勝てぬと知りながら、見上げた心がけだ」

憐れむように褒めて新目が一步前へ出ると、信親の右隣で、彦十郎が鉄砲を構え直した。

「空砲じゃな。弾があるなら、すでに撃っておるはず」

新目は余裕綽々の笑みで、彦十郎を見ている。

友よ 第2回

「す、助太刀いたしまするぞ、若様。三人がかりなら——」

震える体で薙刀を構えながら、信親の左隣に立ったのは弥次郎だ。

「阿呆め！ 下がっておれ」

信親の言葉が終わらぬうち、新目の穂先が信親の左側で、唸りを立てた。片鎌で薙刀を弾き飛ばされた弥次郎が丸腰で慌てている。

弥次郎を庇いながら、新目の槍を払う——

いや、空振りだ。背筋がぞっとした。

——片鎌はどこだ？

突然、両手に衝撃を感じた。槍を叩き落とされている。

新目の強い殺気を感じた瞬間——

銃声がした。新目は表情も変えぬ。空砲だ。

それでも、間近で噴き出した炎が一瞬、新目の視界を奪ったらしい。目の前に現れた彦十郎が、銃身でかろうじて新目の槍を払った。が、新目は槍の引き際に、鉄砲を片鎌で引っ掛けて払い落とした。彦十郎が後ずさる。

信親は腰の太刀を抜いて、大岩を背に立ち、彦十郎と弥次郎を守るように構えた。

この将は恐ろしく強い。勝ち目はおろか、逃げ道もなかった。完全な罠に陥った。

月明かりに代わって、ようやく空が白み始めている。

「家臣を守るとは、土佐の御曹司は面白い戦い方をするものだ」

友よ 第2回

新目は一旦槍を戻し、感心したように頷いた。

彦十郎は腰の脇差を抜き、信親の斜め前へ出た。同じく弥次郎は、その辺りで拾った拳大の石を握り締めて構えている。

「元親は嫡男を溺愛していると聞く。お主を生け捕れば、別の道があるやも知れぬな。その命、預かるとしよう」

新目のあの気迫が立ち込めた。信親たちは覚えず身を竦めながら、じりじりと退がる。

岩場を背に、三人が追い詰められたとき――

突然、岩の上で、獣の咆哮のような呻き声が轟いた。

まるで天から大熊が降ってきたように、漆黒の鎧に身を固めた巨漢が、信親たちの眼前に飛び下りてきた。バラバラと漆黒の兵たちが続く。福留隼人とその手勢だ。

「若造めが！ いっまでも凶に乗りおって。土佐最強の福留隼人を知らんか！」

言うなり隼人が、八尺（約二・四メートル）の大太刀を振るって新目に襲いかかった。

白銀の鎧と漆黒の鎧が交錯する。

片鎌槍と大太刀が火花を散らしながら、丁々発止の攻防を繰り広げていた。

いずれ一步も退かぬ激闘だった。

数十合も打ち合った後、隼人は一旦飛びすきると、楽しげに笑った。

友よ 第2回

「讃岐のちっぽけな城に、これほどの将がおるとはの。わが長宗我部では家柄に関わりなく、カさえあれば立身ができる。わしからお主を推挙し、一軍の将としてわが軍に迎えよう。いかがじゃな？」

ついに森の中に差し込み始めた曙光が、新目弾正の涼やかな笑みを照らし出した。返り血を浴びながら、見惚れるほど精悍な顔つきの美男だった。

「讃岐は、讃岐の人間が治める。他国者の手出しは、無用だ」

「お主らはよう戦うた。が、勝ち目はないぞ。あたら命を捨てるつもりか」

隼人の問いに、新目は即座にかぶりを振った。

「ただでは捨てぬ。朝が来たゆえ、これにて失敬いたそう。友よ、われらの城へ戻ろうぞ」

兵たちを促すと、新目はくるりと背を向け、堂々と藤目城へ帰還してゆく。この場では敵のほうが多い。猛将、福留隼人さえ手出しを控えていた。

「おのれ、みすみす俺の目の前で……」

拾い上げた槍を手に信親が前へ出ようとする、彦十郎の手が肩に置かれた。

「若、やめられよ。この先は、敵の庭でござる」

「このまま、福留隊と共に——」

「またあの将の罠にかかるおつもりか。耳を澄ましてみなされ」

友よ 第2回

暗いうちはあちこちで剣戟か悲鳴が聞こえていたのに、辺りには今、静寂が広がり、隼人の荒い息遣いくらいしか聞こえなかった。

新目は全将兵に対し、夜明けに合わせて城へ戻るよう指図していたのだろう。朝の到来を合図に、あちこちに散開して土佐軍を攪乱かくらんしていた味方を戻らせ、籠城戦に入るわけだ。

同士討ちを恐れた長宗我部は軽挙妄動せず、松茸尾山の本陣で守りを固めていた。突出しているのは信親たちだけだった。追撃すれば、直ちに伏兵と化した敵兵が牙を剥くに違いない。信親が人質とされれば、長宗我部の負けだ。

新目は朋輩の将兵らに囲まれ、悠々と帰城してゆく。

「俺は初陣で、惨憺さんたんたる敗北を喫したわけか。父上に対し、申し訳が立たぬ」

ぼそりと呟くと、彦十郎の低音が返ってきた。

「いや、この戦はやはりわれらの勝利。これ以上、あの将に打てる手はござらん」

まもなく白銀の甲冑が城門をくぐると、音を立てて門が閉じられた。だが、堅固な城ではない。熊手で引き倒せそうなほど薄い城壁は、壁とも呼べぬ木堀にすぎず、満足な高さもなかった。

「敵ながら、あっぱれな戦ぶりよ。武人はかくありたいものでござるな、若」

隼人が励ますように、信親の背を叩いた。

友よ 第2回

「戻りましょう、若様」

慰めるような弥次郎の声に促されて振り返ると、血に染まった長宗我部のへ七ツ片喰かたばみの旌旗せいがあちこちに転がっていた。敵に奪われぬよう、一領具足たちが拾い集めている。



四

高く昇り始めた冬日の下、小川の向こうには、異郷の枯れ野がうら寂しげに広がっていた。

「讃岐へ入る少し前から、誰かに見張られている気がするのだ」

右の彦十郎は首を傾かしげただけで、左の弥次郎が応じた。

「ずっとご一緒でしたが、それがしは気付きませんでしたな」

誰かに冷笑されているような気配を、時おり微かに感じた。振り返っても、それらしき人影はない。今しがたも、野良猫が一匹歩いているだけだった。

——ただの思い過ごしか……。

信親は川べりに片膝を突くと、透き通る小川の水を片手で掬すくい、色を確かめた。

川は不思議だ。掌中の水は透明なのに、集まって川になれば、青や緑となり、時には赤、黒、茶と様々な色に変わる。人も川と同じだと、信親は思っている。清冽な者が集まれば、美しき川のごとく、澄んだ

友よ 第2回

青い輝きを放つのではないか。これから信親が作ってゆく長宗我部家は、そんな者たちの集まりにしたかった。

口に含むと、ほのかな甘みがあった。森に近いせいか。

「民から大切にされている川だ」

川を見れば、そこに住む人間もわかると、信親は思っている。

「若様、この川は柞田川と呼ぶそうです」

弥次郎は信親の隣にしゃがみ込むと、いつの間に作ったのか、形の良い笹舟を流した。

「これから城攻めでござるに、戦場でも川談義でござるか」

彦十郎の低音には呆れが交じっている。

「川はいいぞ。人に水をくれる。魚も獲れる。舟も使える。泳いで遊べもする」

「時として、暴れ川にもなりますがな」

彦十郎の毒舌は、挨拶のようなものだ。

「川に限らず、何事も良い話ばかりではない」

信親は川べりで立ち上がると、肩越しに藤目城を見た。

初日の夜襲で新目勢に煮え湯を飲まされた土佐軍は、小さな城を完全に包囲し、これから総攻めに入ろうとしていた。

「弥次郎。せせらぎには、何と云うてやればよいと思う？」

半農半漁の渡は、傅役もりやくの福留親政にも気に入られていたから、幼い弥次郎を肩車して、石清川の真ん中までよく連れて行ってくれた。

友よ 第2回

大の川好きで、川の楽しさ、美しさ、さらには恐ろしさを信親に教えてくれた。齡をとってから娶めとった若い女房と死に別れた後、渡は仲間の漁師連中にさまざま教わりながら、男手ひとつで「せせらぎ」と名付けた愛娘を育ててきた。幼子が泣き出した理由がわからず、途方に暮れていた渡の顔を思い出すと、心が軋きしんだ。

ふと、「友を殺されたのは、初めてか」という新目の言葉を思い出した。

そうか。かくも心が痛むのは、渡が身分の異なる一領具足であつても、齡が離れていても、心を通わせ合う「友」だったからか……。

「福留殿は情に篤きお人ゆえ、よしなになさいましょう」

弥次郎も心を痛めている様子で、物憂げな顔つきだった。いつかせがまれて笹笛を作り、せせらぎを喜ばせていた姿を思い出す。

「戦で親が死に、子が孤児みなしごとなる。乱世ではどこにでも転がっておる、ありふれた話。子が先立つ親不孝よりは、ましてござろう」

彦十郎が辛辣しんらつに応じると、弥次郎は抗議でもするように笹笛を鳴らした。二人はあまり仲が良くない。直接、言葉を交わすこともほとんどなかった。

「それがしの父に引き取らせましょうか、若様？」

信親の義理の叔父に当たる波川清宗は、乱世には不向きな気優しい男で、戦で一領具足が死に、その子女が孤児になったと知ると、売られたりする前に手元に引き取った。かくて波川領では、戦乱の孤児

友よ 第2回

たちが、貧しくとも身内のように遅たくましく育っていた。たまに弥次郎の案内で訪れる波川城で、信親も会ったことがある。

「馴染みの漁師仲間が世話してくれぬなら、俺からも叔父御に頼むとしよう」

信親は形見の綱をぎゅっと握り締めた。

先刻、戦死した一領具足たちの骸を集めて茶毘だびに付した。渡は陣笠の下が坊主頭で遺髪がないため、腰紐として使っていた漁労の綱を形見の代わりにした。

——すまぬ真似を、した……。

渡は信親の身代わりとなって、死んだ。信親が彦十郎の諫めに従い、弥次郎を見捨てていけば、渡は命を落とさなかったろう。いずれに転んでも、誰かの命が失われていたわけか……。

——いや、違う。俺がもっと強ければ、よかったのだ。

最初の立ち合いで片鎌槍を突き出された時、信親は蛇に睨まれた蛙のように、身動きが取れなくなった。そのほんの一瞬で足を払われた。今もまだ、足首に痛みを感じている。何事も、上には上がいる。師の福留隼人ほど強くならねば、家臣や一領具足たちを守れはすまい。采配もまるで敵わなかった。何度も伏兵に遭い、新目の掌上で踊らされた。

——今の俺では、とうてい新目弾正に勝てぬ。

それでも、この戦はすでに勝敗が見えていた。長宗我部の勝利だ。

友よ 第2回

忠兵衛の進言により、降伏勧告の使者として、桑名太郎左衛門が藤目城へ出向いている。

五

「どうにも厄介な話になりましたな」

忠兵衛の隣で、桑名が言わずもがなの愚痴をこぼした。ため息混じりなのに、早口だ。鼠を思わせる風貌のこの男は有能で弁も立つが、無駄口が多い。もっとも皆、口に出さぬだけで、忠兵衛も、沈黙を守っている元親も、全く同じ気持ちだろう。

本陣の帷幄では、諸将を呼び集める前に、主だった家臣だけで下打ち合わせをする慣わしだ。例えば血気に逸る信親など若すぎる将たちは、方針を決めてから呼んだほうがよい。

「新目とやらは、全員で死ぬつもりか」

元親が苦々しげに漏らした。

新目弾正は降伏勧告を峻拒^{しゆんきよ}し、最後の一兵となるまで戦うと返答してきた。

まさか、かような小城で長宗我部が足止めを食らおうとは。さらに苦戦して兵が死傷すれば、完全に出鼻を挫^{くじ}かれ、この後の讃岐攻略戦にまで支障^{さた}を来しかねない。

「さりとて、西讃の入口で時を無駄にするわけにも参りませぬ」

友よ 第2回

四国統一へ向け、長宗我部は着実に歩を進めてきた。だが中央では、急速に膨張し続ける織田信長が、畿内を制圧せんとしていた。元親は今のところ信長に対し低い姿勢で臨み、宥和を保ってはいるが、四国の小大名など早々に踏み潰して力を付けねば、いずれ織田に飲み込まれよう。

——時が、ない。

元親主従には強い焦りがあった。ゆえに讃岐、阿波、伊予三ヶ国への同時侵攻を企図し、実行に移してきた。阿波は実弟の香宗我部親泰ちかやすに、伊予は元親の軍師、久武親信に攻略させている。

「久武様なら、何となさいまするかな……」

沈黙を嫌ってか、また桑名が無駄口を叩いた。

かねて親信は、抜群の智謀で元親を支え、土佐平定を実現させた。四国統一の道筋を定めたのも親信であり、忠兵衛はその手足として動いてきた。順調に見えたへ三国同時侵攻へは昨年、伊予で躓つまずいた。最も与しやすいと見た公家大名の西園寺家さいおんじを討伐すべく、南予に侵攻した宿将の福留親政が、慮外りよがいの戦死を遂げたためである。

不慮の敗退を受け、今度は親信が伊予郡代となり、自らの手で伊予を平定すべく戦支度を進めていた。東伊予の一部はすでに攻略済みだが、残る伊予の小大名を速やかに服従させ、土予の軍勢をもって東進し、阿讃を完全に平定する。かくも織田が強大となれば、毛利と結

友よ 第2回

んで対抗するほかなかるう。讃岐攻略では、不在の親信に代わり、忠兵衛が元親を補佐する役回りだった。

「不本意なれど、かくなる上は力攻めしかございますまい」

忠兵衛が進言すると、元親は忌々しげに小山の上の藤目城を見や
った。

高低差も少なく守りにくい小城だ。時さえ掛ければ必ず落とせる。敗北はありえなかった。だが、相手の戦い方如何いかんでは、将兵がさらに傷つく。これからの西讃攻略を考えれば、兵力の消耗は避けたかった。

「新目弾正と申す若造は、何を望んでおる？」

元親は吐き捨てるように問うたが、忠兵衛にもわからなかった。

——忠義、か。

いや、奈良勝政は凡将だ。新目が命がけで忠誠を尽くすに値する主君ではおよそない。腰が定まらぬから、藤目城へ援軍も出さぬのだ。自ら攻められれば、勝ち目なしと見て、降くだるだろう。

——ならば名譽、か。

いや、新目はちっぽけな土豪で、兵もせいぜい五百だ。名もなき将が大軍に飲み込まれて討ち死にしたとて、さしたる名も残せまい。四国統一戦の中では、藤目城攻めなど、西讃侵攻の途上で起こった、ただの小競り合いに過ぎぬのだ。

友よ 第2回

保身に汲々とする者ばかりの世にあって、二十二歳の若き将は、何のために敗北必至の玉碎戦を演じようとしているのか。

「勝ち目はありませぬゆえ、呼びかければ、配下の者が寝返るやも知れませぬ」

誰ぞが言ったが、今回の敵は違う。

新目が昨夜、十倍する大軍を手玉に取って翻弄できたのは、寡兵ながら新目勢が将の指図のもと寸分乱れず動いたからだ。おそらく、死を恐れて降るような者たちではない。

「抗う理由はともかく、昨夜の戦いぶりを見れば、新目は口舌の徒にあらず。わが軍も、相応の覚悟で臨まねばなりませぬ」

忠兵衛が陣卓子の上に広げられた絵地図の一か所を指さした。

「まずは東の二ノ丸に攻撃を集中し、福留隊に突入させます」

木堀と堀切があるだけで、気の毒なほど脆い城だ。勇猛な将の率いる一領具足なら、力攻めで城内へ雪崩れ込めるはずだ。

厳しい顔つきでおすつと黙り込んでいた隼人が、「承知」と短く頷いた。

次に忠兵衛は絵地図の上で、本丸の南西を指した。

「二ノ丸さえ落とせば、西の帯曲輪は簡単に奪えるはず。されば昨夜の埋め合わせとして、若殿に一手をお任せあれば、如何」

元親は食い入るように絵地図を見てから、実物の藤目城へ目をやった。

友よ 第2回

華々しい手柄どころか、危うく戦死しかねない憂き目に遭ったのだ。元親は何よりも信親の戦死を恐れ、城攻めでは別に隊を作らせず、同陣させると決めていた。

「南から西にかけて、ちと広い帯曲輪じゃな」

新目による采配の妙を考えれば、突入の仕方如何では、信親が敵に包囲されると懸念しているわけか。だが、彼我の圧倒的な兵力差では杞憂きゆうといえた。昨夜と違って、戦場は夜の森ではない。

「ご懸念には及びますまい。いかなる名将でも、この兵力差で逆転はかないませぬ。桑名隊の弓で弱らせた後、若殿に帯曲輪を攻略いただきましよう」

桑名の弓は土佐一で、手ずから厳しく鍛え上げた弓兵による一斉射は強力だった。

元親は十ほど数えてから、低音で応じた。

「いや。万に一つも、信親の身を危うくする戦はできぬ」

「畏れながら戦は、命を懸けて、やるものでございませぬ」

自らは安全な所において、家臣だけに命のやりとりをさせる將の命令など、兵が従いはしない。そのような軍勢は、ひとたび崩れたなら、皆われ先に逃げ出すだろう。総大将自らが命を張るからこそ、配下の將兵は奮い立つのだ。幾多の戦に勝利してきた元親には、わかり切った話だが、よほど昨日の夜襲が堪こたえているらしい。

友よ 第2回

「初陣で守りに入ることを覚えれば、若殿にとっても後々のために
なりますまい。この戦は必ず勝てます。勝ち戦ほど自信に繋がる良
薬もありませぬ。主郭へ討ち入った後は、福留殿に膳立てをさせてか
ら、若殿に敵将の首を挙げていただくのがよろしいかと」

信親は非の打ち所のない若武者として育ちつつあった。だが、いか
に良質の鉄鉾であっても、鍛え上げねば、決して強き鋼となりはしな
い。

元親は押し黙って長らく考え込んでいたが、ようやく頷いた。

「わかった。皆を呼べ」

元親は名君だ。良策なら、よくよく思案した上で必ず採用してきた。
もつとも、これまでは、の話だが――。



六

さつきまで高く昇っていた太陽が早くも帰り支度を始め、冬の日
差しは力強さを失っていた。

元親の言いつけに従い、信親は敵弓鉄砲の射程を避け、帯曲輪の南
端から本丸を見上げている。

――光富権之助殿、戦死！

またか。何と苛烈な抵抗なのだ……。

新目弾正は見事な采配で土佐軍を苦しめ続け、三度の力攻めにも
持ち堪えていた。が、落城の運命は定まっている。

友よ 第2回

福留隊の猛攻で二ノ丸は陥落し、桑名と信親衆によって帶曲輪も制圧され、残すは本丸のみとなっていた。東西に長い本丸には、周りに低い土塁が巡らされているだけだ。

守勢は限られた数の鉄砲や火矢を使って執拗に抗ったが、激烈な戦闘の末、大半が戦死した。今、本丸に立て籠っている兵は、もう百人に満たぬだろう。土佐兵にも多くの死傷者が出たが、新目勢は弾正以下、将兵が一人残らず負傷しているはずだった。

「やはり敵は、降伏勧告に応じられぬ、と」

山麓の本陣から戻った彦十郎の声音には、珍しく感嘆が含まれていた。

「されば手筈通り、交替で腹拵はらしらえを済ませ、日暮れと共に総攻めをせよとのお指図にて」

「なぜ、あの男は死を選ぶのだ……?」

信親は最初、渡ら戦死した将兵の仇討ちに燃え、怒りに任せて槍を振るっていた。だが、城門を破られ、曲輪を落とされ、次第に数を減らしてゆく敵の姿を見ているうち、胸が痛み始めた。

藤目城は大風でも吹けば飛ばされるような小城だ。西讃の土豪たちは自城に籠って守りを固めており、絶望的な戦いをいくら続けたところで、援軍が来る当てはない。

——あの者たちは、いったい何のために戦って、死ぬのだ……。

友よ 第2回

敵ながら、その戦いぶりは信親だけでなく、土佐の全将兵に畏怖と讃嘆の念を抱かせている。

隣で、彦十郎が遅れて問い返してきた。

「若なら、いかがなされた？」

信親も決して敵に降りはいしない。長宗我部の誇りを守るためだ。

「俺は名家を継ぐ身だが、新目弾正は違う。彦十郎なら何とした？」

「大軍が城下へ迫る前に、尻尾を巻いて逃げまするな。さっさと武士なんぞやめて神に仕え、学問をしながら暮らし申す」

「問うだけ、野暮であった」

彦十郎は長宗我部が四国統一を果たしたら神官に戻る約束で、信親に仕えていた。陣中でも暇さえあれば、何やら小難しそうな書物を広げているが、神職に未練があるらしい。

「無名なれども、誇り高き将なのやも知れませぬな」

ぼそりと口を挟んできたのは、弥次郎だ。

いかに小さくとも、武家の誇りを懸けて、その当主が命を投げ出すのはまだわかる。だがなぜ、全将兵がかくも一丸となって徹底的に抗い、全員が死を選ぶのか。

翻って長宗我部の一領具足たちはどうか。はたして信親のために戦い、命を捨てるだろうか。

「弥次郎なら、何とする？」

友よ 第2回

「面目ありませぬが、大人しく降ります。勝てぬ戦で、無駄に将兵を死なせとうありませんゆえ。それがしにはまだ、やりたいことが沢山ございます」

「お前らしい答えだ。かくなる上は、新目弾正本人に尋ねてみたいものだな」

「生きて会えれば、の話でござるが」

彦十郎の口調はいつもの毒舌というより、詠嘆に聞こえた。

信親は落城を待っただけの、ちっぽけな城の本丸を見上げた。

冬の日差しはもう、ほとんど差していない。本当にこれが、命を捨ててまで守るべき城だったのか。新目は何を守ろうとしているのだ。

「俺は新目弾正が欲しい。一手の将となせば、四国統一にあって恃たのみとできよう」

渡を始め、新目と戦って命を落とした将兵には済まぬと思う。だが、これから心強い味方として戦ってくれるなら、赦してはくれまいか。

「福留殿に釘を刺しておきませぬと、首に向かって説くことになり申そう」

彦十郎もいくぶん乗り気らしかった。

「さっき隼人と改めて段取りを確かめた。父上の命で、首は必ず俺が挙げる話になっている」

思わぬ激戦となったが、藤目城攻めは本来、信親の初陣を飾るために用意された戦だ。落命しかけた昨夜の教訓を踏まえ、信親は隼人が

友よ 第2回

呼ぶまで外にあり、勝利が確定となるまで本丸へ入らぬよう、元親から固く戒められていた。

——はま 浜田 だ 善右衛門 え 殿、ちん 戦死なさいましてございまする！

城内からいきなり狙撃されたらしい。歴戦の勇将さえ、この名もなき城で命を落とした。

「何としても、新目弾正を降らせて、わが手に加えるぞ」

信親は まぶた 瞼を閉じると、新目と くつわ 轡を並べて戦場へ出る自分の姿を思い浮かべた。

福留隊の漆黒に対して、信親隊は新目の好む白銀がよかろう。白銀は値が張るから近い色でいい。新目のごとく人物と才能に優れた者に出会うたび家臣として、いずれは四国最強の軍勢とするのだ。

かくも立派な将が自分に仕えているのだと、父母に誇りたかった。派手に ほ 法螺貝 が が吹き鳴らされた。いよいよ総攻めの合図だ。これが最後の攻撃となろう。



七

藤目城の本丸攻めは一層、苛烈を極めた。

すでに夜のうちに福留隊が突入に成功していたが、制圧には夜明けまで掛かり、長宗我部方も甚大な被害を出した。どれだけの土佐兵が死に、傷ついたかさえ、まだわからぬほどだ。

友よ 第2回

遅い日の出が、剣戟と喧騒の収まった小城の本丸を照らそうとしている。

「若殿、こちらでござる」

黒具足に身を固めた隼人に案内されて、信親は本丸奥の一室へ入った。

中には、福留の手勢十名ばかりが、部屋の一隅に向かって長槍を突きつけていた。ひとりだけ、具足も身に着けぬ小兵が混じっている。味方の忍びらしく、夜明け前の川の色にも似た地味な濃鼠の野良着姿だった。目だけを出した頬かぶりのせいで、顔つきはわからない。

部屋へ差し込む清澄な冬の陽光に、血で染められた槍やり衾ぶすまの穂が鈍く煌きらいている。

その先に、ひとりの敗将が力尽きた様子で壁にもたれ、足を投げ出して座っていた。初陣の手柄として、御曹司たる信親のために用意された敵将だった。

本丸内外の掃討は完全に済んだらしく、さっきまでわずかにしていた剣戟の音も、今ではすっかり止んでいた。戦の終わった小さな城を、早朝の静けさが包んでいる。川に浮かんで餌を探いさしす磯鷗いさすの囀りさえ聞こえてきそうなほどだった。

将以外の兵はすべて、死に絶えたわけか……。

その将の前に、信親は立った。

友よ 第2回

最後まで長宗我部軍を苦しめ続けた新目弾正は、血糊ちのりで汚れた木壁にもたれ、肩で荒い息をしていた。二十二歳の若き敗将は、腹と腿を槍で突かれて深傷を負い、もう立ち上がれぬ様子だった。右手に握られた血塗りの太刀は毀こぼれ、力なく床に置かれたままだ。白銀色だった鎧は、自他の血ですっかり赤黒く染まっている。新目の脇には、白銀の兜が所在なげに転がっていた。

傷口からは、すでに相当の血が流れ出ている様子だった。このまま捨て置けば、確実に死ぬ。だがまだ、新目は生きていた。

「実に見事な戦であったぞ、新目弾正」

信親が声を掛けると、新目は眠りから覚めたように顔を上げた。血と泥で汚れた顔でも、惚れ惚れするほどの美男だった。失血のせいで蒼白だが、なお精悍さを失わず、黒い瞳には荒々しい生の輝きはまだ残っている。

「乱世へ出るにあたり、初陣でお主のごとき将と巡り合えたは、僥倖ごうしやうといえる」

信親は手にした槍を、敗者に対し向けてはいない。

「ほう、長宗我部の勇ましき御曹司、か……」

恨みも、蔑さげすみもない。秋の小川が人知れず澄んで流れるように、落ち着いた声だった。

友よ 第2回

「俺は長宗我部家を嗣ぐ身だ。わが片腕として、お主のごとき驍将せうしょうを召し抱えたいと思っていた。弾正、受けてはくれぬか？ お主と共に四国の乱世を終わらせたいのだ」

新目は床に手を突いて座り直そうとした。が、できずに呻吟しんぎんして、また壁に倒れかかった。

「承った。が、若殿のお役に立たんと思えども、ちと血が流れすぎたようだ……」

「おお、弾正。しっかりせよ！」

信親は槍を捨てて新目に駆け寄り、親しく助け起こした。

「わが家臣、新目弾正は深傷ふかでを負っておる。早う手当てせねばならん。皆、手を貸せ！」

叫びながら隼人たちを顧かえりみた時、耳元で新目の鈍い呻き声が聞こえた。

慌てて見やると、太刀を握った新目の右腕に飛苦無とびくまいが刺さっている。新目は震える左手で苦無を抜こうとしていた。

「放ったのは、誰だ！ 大事ないか、弾正？」

強い殺気を感じた。まさか――

慌てて身を引く。

苦無を握る新目の左手は、信親の頬をわずかに掠め、空を切った。

「ちっ、仕損じたわ」

新目が口惜しそうな表情で舌打ちした。

友よ 第2回

「……なぜだ、弾正？」

信親の頬から血が流れ落ちてゆく。

「御曹司なんぞには生涯わかるまい。あと半歩で、もう一矢報いられたものを……」

ボツと風音がし、今度は苦無が新目の首筋を切った。噴き出す血飛沫がまともに信親の顔に掛かる。世界が真っ赤に染まった。

「誰だ？ 殺さずとも、よいではないか！」

信親は怒号を浴びせながら振り向いた。さっきの濃鼠の小柄な忍びが放ったらしい。

「されど、この者がおらねば、若は首筋を切られておりましたぞ」
代わりに答える隼人を、信親は睨み付けた。

「これほどの男だ。命を懸けねば、家臣になってはくれまい」
新目の端整な顔はすでに血の気を失っている。

——もう、助からぬ……。

死への旅路に足を踏み出した若者に、悔しげな様子は微塵みじんも窺えなかった。

「せっかく出会えたのに、無念だ。……お主に尋ねたい」

信親は新目をもう一度抱き起こすと、死にゆく若者に向かって問いかけた。

「必敗無意味と知りながら、お主と新目の将兵は、なぜ最後まで戦ったのだ？」

友よ 第2回

「犬死ではない。われらの戦いと死が持つ意味は、これからの歴史が証してくれよう」

「……歴史が？ なぜ新目の者たちは皆、お主のために命を捨て、忠義を尽くしたのだ？」

若き敗将は、死に際にまるで似合わぬ清々しい微笑みを浮かべた。

「忠義や忠誠なぞという、堅苦しいものではない。われらはただ、故郷を守るために集い、友として戦っただけだ」

「友、だと……？」

「そうだ。同郷に生まれ、お主のごとき主のもとで戦ができたなら、それもまた、悪くない一生であったやも知れぬ……」

口元に笑みを残したまま、新目弾正は事切れた。

絶命した敵将を、信親は両腕に固く掻き抱いた。

巡り合わせが悪すぎた。もし新目が藤目城の守将とさえならなければ、もし主君の奈良ら西讃の土豪が降伏を選んでいれば、戦う必要もなかったはずだ。

「最後まで、見上げた将でござった」

隼人が肩に手を置くと、信親は新目の骸をそっと横たえて、立ち上がった。

「新目弾正以下、勇猛苛烈なる讃岐将兵たちの霊を、丁重に弔よむってやりたい」

「味方もござる。土佐方の死者は七百を下りませぬ」

友よ 第2回

信親は息を呑んだ。勝った側の死者のほうが多いというのか……。取るに足らぬ小城の守将が、五百の寡兵と共に繰り広げた二日間
の死闘は、予想だにせぬ甚大な被害を土佐軍に与えた。

「本当に長宗我部は、勝ったのか……？」

ぼそりとした信親の声に、誰も答えなかった。

血腥ちまへぐさい部屋には、しわぶきひとつ聞こえない。

大軍が寡兵に勝利する場合、数と力の差のゆえに、勝者の側に戦死者はほとんど出ない。彼我の兵力差を考慮するなら、長宗我部は新目に大敗したとさえ、言える。

見渡すと、濃鼠の小柄な忍びの姿がいつのまにか消えていた。

「隼人、さっきの忍びは何者だ？」

「あの者は入江左門。当家随一の忍びにございまする」

入江がいなかったなら、信親は初陣のこの城で命を落としていたわけか……。
だがそれでも、信親は入江を好かぬと思った。



八

「彦十郎、川歩きに付き合ってくれぬか」

軍議が中休みに入ると、信親は彦十郎に声を掛けて、城門を出た。

友よ 第2回

阿讃土三国の境近くにある白地城は、二年前に元親が手中に収めた阿波の要衝である。讃岐平定を睨む長宗我部軍の拠点とされ、四国最大の吉野川に面していた。

「今日はへ白地の渡し」から下流へ歩きたい。弥次郎が先に花駒城はなこまじょうで待っているはずだ」

弥次郎と二人で示し合わせ、川の魅力を彦十郎に伝えようとしてきたが、まだ成功していなかった。後ろには、警固の従者たちが黙って付き従っている。

真冬の吉野川が青緑の流水を静かに湛たえていた。音もなくゆつたりと流れる川には、幾隻かの舟が止まったように浮かんでいる。血で血を洗う戦いのあった藤目城からは、山を越えて南へ二里余り離れているだけだが、大なる吉野川によって切り開かれた、のどかな別天地だった。

「いたく吉野川を気に入られたようでごさるな」

「ああ。俺に嫌いな川はない。大河も小川も、濁った川も澄んだ川も、長い川も短い川も、すべて好きだな。だが俺は、短くてもいい、美しく澄んだ川のようにありたい。知っておろうが、もともと俺を川好きにしたのはお主の父親だ」

信親の傅役、福留親政は武芸百般に秀でた豪傑だが、自らはひと通りの教養しかなかったため、学問を忠兵衛に請け負わせた。幼い弥三郎は城のすぐ下を流れる石清川に関心をもち、よく物を尋ねたが、忠

友よ 第2回

兵衛は川について一家言を有していた。というのも、土佐神社の祭神であるへ味あじ鋤すきた高たか彦ひこ根ね神のかみの神格を巡っては諸説があるところ、忠兵衛は「蛇神なり」との説をとっており、蛇神の正体たる土佐の川について誰よりも詳しくかったのである。猿猴も川に棲むから、信親はますます川好きになったというわけだ。

かくて幼少から信親は、傳役の福留父子や渡、忠兵衛にも頼み、機会あるごとに川を歩いてきた。どこへ行っても、川があったら必ず歩き、冬でなければ泳いだ。

吉野川に注ぐ馬路川うまじがわを越えると、支城の花駒城が見えた。異郷を流れる川の辺で時どき立ち止まりつつ、ゆったりと川を楽しむ。本来なら幸せを感じるはずが、今は違う。戦のせいだ。

川べりまでせり出している松林を過ぎ、吉野川が東へ大きく湾曲し始める辺りで、信親は立ち止まった。

「新目はあの戦で、しばしの間、故郷を守ったわけだな」

川を眺めていても思い出すほど、初陣は余りに凄絶だった。

「愚父によれば、讃岐攻めは来春以降になるとか」

長宗我部軍は本来、このまま讃岐で年を越して、西讃侵攻戦を進める肚積りだった。だが、多大な被害のために戦を継続できず、兵をいったん白地城まで引いた。年が暮れる前に、土佐へ帰還するかと噂されていたが、やはりそうなるらしい。

友よ 第2回

新目弾正は死して、敵の讃岐侵攻を遅らせたと言える。たとえ負け戦であっても、敗者が死後の歴史を変えることはあり得るのだ。だが、たった数か月遅らせただけではいか。

「彦十郎、あれが戦……なのだな？」

穏やかな川の流れの前では、ゆっくりと物を考えられる。川音に紛れて、たいていの会話が許される気もした。

長宗我部の跡継ぎとして、信親も戦に明け暮れる人生を覚悟してきた。だが、戦場がかくも苛酷な修羅場だとは考えていなかった。敵よりも多くの土佐兵の屍しかばねを積み上げて、ようやく得られた勝利だ。今回のような激戦は稀だと隼人も言うが、信親はまだ他に戦を知らなかった。

「世を捨て、神に仕えなくなるわけでござる」

「お主の気持ちがよく、わかった」

彦十郎は戯れ言てとことのつもりだったのか、即答した信親を怪訝そうに見ている。

「死んだ将兵のなかには、俺と齢の変わらぬ者もいた。あの者たちの人生は何だったのだ？」

皆、まだ生きてかかったはずだ。新目に妻子がいたのかは知らぬが、まだ二十二歳だったという。

「不条理な理ことわりこそ、乱世でござる」

「ならば、一刻も早う、乱世を終わらせねばならぬ」

友よ 第2回

天下は難しくとも、四国なら、長宗我部の力で可能なはずだ。現に統一された後の土佐は、平和を謳歌していた。そんな土佐で、信親は育った。速やかに四国を統一して、皆の安寧を勝ち取る以外に、藤目城攻めで命を落とした両軍の兵たちの死に報いる道はあるまい。

再び歩き出して花駒城に着いたが、待っているはずの弥次郎の姿がなかった。

「変だな、おらぬぞ。弥次郎はどこへ行ったのだ」

櫓^{やぐら}へ登って吉野川を見下ろすと、向こう岸に人影があった。両手を振っている。

「若の案内もせずに、川遊びとは」

彦十郎が呆れ顔で吐き捨てた。弥次郎を子供扱いし、相手にしていない。足手まといだと、邪魔者扱いする節^{ふし}さえあった。

「俺を喜ばせようと考えたのだ。目の前に川があると、川好きは無性に渡りたくなる」

信親は遠く吉野川の下流を眺めてから櫓を降り、来た道を白地城へ引き返す。

冬日で温もりのある川風に吹かれながら、白地の渡しまで戻ると、向こう岸からやってくる小舟の上に、弥次郎の姿が見えた。

「若様、向こう岸もご覧になる値打ちがございます！ 板野から眺めれば、下流は違った色に見えまする」

弥次郎が流れの半ばから大声で叫んでいる。

友よ 第2回

信親が手を挙げて、彦十郎は素知らぬ顔でそっぽを向いていた。「なぜお前は花駒におらんんだ？」

小舟から降りた弥次郎を、彦十郎がぶっきらぼうに責めた。

「すみませぬ。若様ならきつと対岸の様子を——」

「指図通りに動かねば、戦では命取りだ。覚えておけ」

彦十郎の前で縮こまる弥次郎が、気の毒になった。

「川遊びはひとまず戦ではないぞ、彦十郎」

信親は二人の間にさりげなく割って入りながら、吉野川に向かって雄叫びを上げた。

「さあ、戦は終わったのだ。また、次の戦が始まるまではな」

「若、戻りませぬ。川ばかり眺めて何がありましたようや」

「炎を眺めておると、彦十郎も楽しかろう？ 川と炎は同じだ。常に色と形を変え続けている」

「私は別段、炎を眺めたりいたしません」

いかにも素っ気ない口吻だ。

「若様。谷殿を連れて仁淀川へ行き、ひがな一日、川を眺めておきましょう。さすればきつと、川の素晴らしさがわかるはず」

「それはよい。土佐へ戻ったら、皆で参ろうぞ」

「たっつのご命令とあらば、『人元神力神妙経』じんげんじんりきしんみょうきやうなどを持ってお供いたしまするが」

友よ 第2回

川でも学問をする気らしい。彦十郎の肩に手を置きながら、信親は笑った。

「ならば、お主に命ずる。俺と仁淀川で遊べ。川べりで書見などしておってもよいぞ。ふだんより学問が進むと気付くであろう」

「家臣に川遊びを命ぜられるとは、変わった主じゃ」

彦十郎が毒舌で応じたとき、漁を終えたらしい小柄な老漁師の乗った川舟が一艘、しずしずと近づいてきた。老いた身では水上が寒いのか、茶染の野良着に頬かむりをしている。

「若、そろそろ刻限でござるぞ。われらは軍議の続きに出ねばなりませんぬ」

「川におると、あつという間に時が経つ。弥次郎、向こう岸で、彦十郎の毒舌にも負けぬ綺麗な場所を探しておいてくれぬか」

「畏まってございます」

弥次郎が再び渡しの小舟に向かい、信親が彦十郎と踵かかを返した時

信親の背後で突然、悲鳴が上がった。

驚いて振り返る。さっきまで川舟に乗っていた老漁師がうつ伏せに倒れていた。背には飛苦無が刺さっている。見ると、漁師の手には短刀があった。信親を刺そうとしたのか。

短刀を踏みつけながら近寄ると、信親は腰を落とし、飛苦無を抜いて漁師の体を裏返そうとした。予期せぬ柔らかい感触に戸惑った。

友よ 第2回

仰向けにして頬かむりを取り去ると、老人と思っただのは若い女だった。信親よりも年長だ。口から血を流した女は綺麗な顔立ちをしていたが、充血した目で信親を睨んでいた。

「あと、一步のところ、で……」

「俺が、憎いのか？」

「憎い！ わが夫の無念を思わば——」

顔面蒼白の女が夥おびただしい血を吐いた。信親の小袖が今日もまた赤く染まる。

「そなたは、もしや新目弾正の妻か？」

悔しそうに頷いた女は口元を真っ赤に染めながら、呪いの言葉を吐いた。

「御曹司が死ねば、元親にもわれらの無念がわかるはず。わが夫の死んだ齡までしか生きられぬと知れ——」

女が苦しげに咳き込んだ。

「手当てをすれば、まだ助かるやも知れぬ。誰かある！」

顔を上げると、傍らに腰を下ろした彦十郎が小さく頭を振った。

「今しがた、息を引き取った様子」

驚いて視線を戻すと、女は充血した目をカッと見開いたまま、事切れていた。

「なぜ死んだ？ まさか、毒を塗ってあったのか」

「おそらくは。鮮やかな手並みでござる」

友よ 第2回

回りには、弥次郎や従者たちが輪を作っている。信親は女の両の瞼を閉じてやった。

「誰が、やった？」

幾つか並ぶ渡し舟から、川辺に降り立つ濃鼠の小柄な姿が見えた。頬かむりをして、目が少し見えるだけだ。入江左門か。腑に落ちた。外へ出るといつも視線を感じたのは、あの忍びがいたからだ。元親か忠兵衛が警固のために、手練てだれの忍びを配したに違いない。

川岸に上がり、黙って立ち去ろうとする後ろ姿に声を投げた。

「しばし待て、入江とやら。そなたは人の命を何と心得る？」

入江は首だけで振り返ると、醒めた目つきで信親を見た。獣の眼だと、信親は思った。

「殺あやめずともよいではないか。大切な夫の命を奪われたのだ。長宗我部を憎む気持ちもわかる。乱世で人を殺すのは当たり前前だと言う者もいるが、違う。乱世なればこそ、命は尊いのだ」

入江は答えない。代わりに、彦十郎が口を挟んできた。

「この女を始末せねば、若は命を落としておられたやも知れませぬ」
信親は彦十郎を手で遮りながら、入江に向かって続けた。

「俺の命を二度も助けてくれたことには、礼を言う。だが、そなたはなぜ、すぐに殺すのだ？ とくと話せば、わかり合えたやも知れぬではないか」

離れて、やはり黙したままの入江に、信親は苛立った。

友よ 第2回

「何ゆえ、わが問いに答えぬ？」

信親は珍しく感情を露わにして怒った。

「若、長宗我部で最も優れたる忍びは、敵に喉を切り裂かれて口を利けぬと、愚父から聞いた覚えがござる」

啞然として入江を見た。それゆえに深く頬かむりをして顔を隠しているのか。

「……そなたは、喋れぬのか？」

短く頷く入江に、信親はそれ以上、声を掛けられなかった。入江もまた、長宗我部のために苛烈な人生を歩んでいる。だがそれは本当に、入江の望んだ道なのか。

「一番悪いのは、俺を殺そうとする人間でも、お前でもない。人が人を殺し合う間違った時代だ。人が人を憎まねばならぬ今の世を、俺は変えたい。乱世を終わらせ、戦を失くすのだ。この四国から始めたい。手を貸してはくれぬか？」

諾否もわからぬ目つきで、入江はかすかに会釈すると、音もなく吉野川の川べりを去った。

日が陰ったせいとか、川を渡ってくる風が急に木枯らしのように冷たくなった。

(つづく)